

2022 年度大学評価委員会経営部会の評価を受けて

法政大学総長 廣瀬克哉

大学評価委員会経営部会による 2022 年度の「大学評価」と「国際化評価」をいただいた。大学評価については評価項目として①本学の内部質保証システム全体の適切性について、②本学のコロナ禍でのキャリア支援についての 2 つをお願いした。国際化評価については、①SGU 事業の進捗状況とグローバル化への対応について、②派遣・受入留学生の支援の 2 項目をお願いした。それぞれ 4 名の有識者委員の方々に書面評価をいただいたうえで、本学の関係役員・役職者のインタビューを行い、評価報告書として確定されたものである。

学外の有識者によって評価をいただくことは、学内のピア・レビューという性質を持つ自己点検・評価では自明のこととして見過ごされがちな点について、第三者の目で重要な課題を指摘いただいたり、専門家の視点から学外の優れた取り組み事例などをご教示いただいたりする貴重な機会となっている。たとえば現在の本学における自己点検・評価活動は、一定の年月をかけて徐々に形成された結果であるため、その過程で形成された諸組織間の関係性の複雑さや、各種の活動の構成やあり方については、自明のこととして受け取られがちである。その結果として諸活動の負荷が徐々に高まりながらも、それを整理して負荷を軽減する取り組みに踏み切る契機が内発的には得にくくなっている面がある。今回の大学評価については、活動の成果については概ね肯定的な評価をいただいたが、学内構成員の負荷についての注意喚起をいただいたことは、重要な気づきの機会となった。

国際化評価については、SGU 事業が終盤に向かいつつあるタイミングであり、かつ、グローバルな人的交流などについてコロナ禍からの復帰が始まりつつある時期での評価をいただくこととなった。コロナによって強いられたオンラインの取り組みのメリットが、ポストコロナに向かっていく段階でも効果的に活用されていることなどについて肯定的に評価いただいた。強い制約の中で工夫したことの成果を確認できたことは心強いことだ。

他方で、事業開始に当たって設定した目標値を達成することに注力をする過程で、目の前の具体的な取り組みの進捗状況ばかりに注意が集中してしまうことがある。法政大学のグローバル化が、本学の教育理念の実現や、本学が目指す将来像の達成にとって、どのような意義を持つのかという観点の重要性を提起いただいたことは、SGU 事業の最終年度に向かっていく中で、非常に重要なメッセージとして受け止めた。補助事業としての SGU が完了するタイミングで、あらためて本学にとってのグローバル化のあるべき姿と、その意義を全学で共有していくことに取り組みたい。